



Social Designer

インタビュー

これからの社会デザイン研究科 新任教員を迎えて



まる やま しゅん いち

丸山 俊一 先生

NHKエンタープライズ エグゼクティブ・プロデューサー／東京藝術大学客員教授。慶應義塾大学経済学部卒業後、NHK入局。ディレクター／プロデューサーとして様々な教養ドキュメントを企画、制作。『欲望の資本主義』『欲望の時代の哲学』『世界サブカルチャー史 欲望の系譜』他。著書に『ハザマの思考』（講談社2025）『これからの時代を生き抜くための資本主義入門』（辰巳出版2025）など。映像メディア論／社会思想／社会哲学／AI社会論などを探究。



司会・聞き手／

おさ ゆ き え 長 有紀枝

立教大学大学院社会デザイン研究科教授・研究科委員長。社会学部教授。認定NPO法人難民を助ける会（AAR）会長。専門はジェノサイド予防、国際人道法、紛争下の文民の保護や人間の安全保障など。著書に『入門 人間の安全保障』（中央公論新社2021）、編著に『スレブレニツァ・ジェノサイドー25年目の教訓と課題』（東信堂2020）など。沖縄県「恒久平和に貢献する万国津梁会議」委員。

2024年4月に特任教員として着任された、NHKエンタープライズのエグゼクティブ・プロデューサーでもある丸山俊一先生に、本研究科の印象やプロデューサーとしての原点、社会デザイン学についてのお考えをうかがった。

【思考のツールとしての映像】

長 丸山先生は、「爆笑問題のニッポンの教養」や「欲望の資本主義」「世界サブカルチャー史 欲望の系譜」など、大変特長のある番組作りをされてこられました。どのような問題意識が、先生をこうした分野（あるいは番組作り）に駆り立てたのでしょうか？

丸山 「教養番組」というと何か確立したジャンルがありそうですが、実感としては、「私たちは今、どんな時代、どんな社会に生きているのか？」という素朴な問いをその都度のテーマと線で結び、ディレクターたちとの対話と試行錯誤がそれぞれの形をとってきたというところだと思います。どの企画も、走りながら考えてきた結果という感覚があります。

映像を「思考のツール」とし、「問い」と「仮説」をどう立てるか？視聴者の皆さんと共に考えるフレームをどう共有できるか？ベースにある問題意識は変わることがありません。

長 それは、先生のご経歴と関係があるのでしょうか？ご経歴を拝察すると、丸山先生は、1962年に長野県にお生まれになり、慶應義塾大学の経済学部に進学されました。同時に東大の駒場にも通われたとか。どのようなきっかけがございましたのでしょうか。

丸山 学生だった当時80年代は良くも悪くも「日本的経営」がもてはやされ、「いい学校」「いい会社」という流れで「終身雇用」の大企

業を目指すことが「人生の正解」のような空気が日本社会全般にありました。そんな時代の「本流」にどうも馴染めないと感じるタイプとしては、大学こそ試行錯誤の貴重なラストチャンスのように思われたのです。就職の為の承認を得るというのではなく、自らの複数の可能性を開く為の場とする為には？そんな思いから籍のある慶應に通いつつ、もう一つ東大教養学部もウロチョロしていました。日吉も三田も、駒場も、実に風通しの良いキャンパスで、友と対話し、歩きながら考える日々を送れたことに感謝しています。あの頃、様々な知を、ジャンルを超えて吸収できたことが、その後の人生の原動力となっているのかもしれません。

長 その後、NHKに入局されたわけですが、先生はもともと放送メディアにご関心があったのでしょうか。また、最初の配属先に、テレビ番組制作ではなくラジオ第2放送を志望なさっていたともお聞きしています。珍しいご選択だったのではないかと思います。

丸山 そうですね、同期の新人ディレクターが自己紹介する場で、多くが「NHK特集」や「大河ドラマ」などの志望を口にする中、珍しがられた記憶があります。当時のNHKラジオ第2には、様々な分野の最前線を走る人々からシンプルにフラットに話を引き出すスタイルの「教養番組」がありました。アカデミックな関心とジャーナルな問題意識、その両方をラジオという媒体で満たそうと考えていたわけです。

駆け出しの新人でも小さなコーナーの演出をしたり、わずかなスペースでも自分で記事が書けたりと、なんとか表現の試行錯誤をする場を持てるのではないかとということからメディアへの志望も始まっていたのですが、自らの問題意識と社会の課題との間に連続

性を見出せる場を探すのに必死だったのだと思います。収録機を担いで一人インタビューに出かけ、ハサミ片手にテープをつぎはぎし自分で編集、放送にこぎつける。そうした過程にこそリアリティを感じられるというか、制作の過程で考えることができる日々の可能性を感じていました。結果的には、ラジオは新人時代に少しだけ経験し、基本テレビばかりの日々となりましたが、今でも僕が着想する企画は実はラジオ的だと思うことがよくあります。

長 プロデューサーとして最初に手掛けた「英語でしゃべらナイト」という番組が、先生の番組作りの大きな転換点になったと伺いました。どういうことでしょう。

丸山 あの番組は、グローバル化が叫ばれる時代に視聴者の皆さんに英語に親しんでいただく意図もあったわけですが、毎週制作を通して僕の心の中で明確になっていったのは、企画の核心は「異文化コミュニケーション」だという思いでした。毎回スタジオにゲストの方をお迎えし、思わぬところで英語を使うことになった体験談、失敗談などをお聞きし、司会のパッケンが話を膨らませていくバラエティーでしたが、コミュニケーションとは、そもそも言語の問題なのかという本質的な問いが生まれたのです。単に文法通りの正しさなどの問題ではなく、まったく異なる背景、文化を持つ他者同士が会合う時、「わかり合う」とは一体どういうことなのか？その探究ではないかと。すると、単に言語表現の問題などを超えて人間の認識のあり方や他者性の受容の本質まで考察の射程に入ってきます。対話の可能性にもあらためて気づくわけです。きれいなオチがある話よりもリアルな体験談、そのフラグメントの方が想像力も広がり説得力を持つこともあるという発見です。そうすると、番組にも、そもそも起承転結をつける必要があるのだろうか。根本の理念がブレさえないければ、「起承転結」などなくても、「起承転々」で良い、他者同士がその異質さを認め合う過程自体に発見があり、表現となるという感覚が自分の中に芽生えたことは大きかったですね。

こうした経験から、「爆笑問題のニッポンの教養」という番組も生まれました。たとえば哲学の教授と、自身の笑いの哲学を持つ太田光さんが侃侃諤諤の議論をする…、これも「異文化コミュニケーション」ではないか、と。その後も、異と異を持つ方同士がぶつかり合う中、どこまでがわかり合えるか、そのプロセスを丁寧に記録し視聴者の皆さんに両者の間に参加していただく感覚で番組は成立するという確信が生まれ、その開かれた精神が「ニッポンのジレンマ」や、現在の「欲望の資本主義」「世界サブカルチャー史」などにもつながっています。

かつては、問題に行き詰まったとき西欧諸国の「先進」事例のケーススタディでもある程度説得力を持つことができました。しかし、現代は日本が課題先進国と言われるような状況です。正解がない中で視聴者の皆さんと「問い」を共有する時代になってきているのがこの四半世紀ぐらいではないかと思います。定型に則って完成形を目指すような仕事の仕方が苦手で、常にフラットに現象を捉え、現在進行形の対話のプロセスまで開示していく姿勢を好んでいた変わり者のマインドに、皮肉なことに時代が追いつきマッチし始めた、という言い方もできるのかもしれませんが。

【ハザマの思考と社会デザイン】

長 これまで「映像」のお話を中心にうかがってきましたが、丸山先生は現在、文芸誌『群像』（講談社）に、10頁と比較的長い文章の連載をお持ちです（2025年1月に書籍化）。タイトルは、「ハザマの

思考」。タイトルに込めた思いをお聞かせくださいますか？ また「ハザマ」はカタカナですね？

丸山 「教養番組」の制作をしている人間ゆえの思い、葛藤などを言葉にと、編集者の方からお話をいただいたとき思いついたのが、「ハザマの思考」でした。映像と活字、音楽と言葉、情報と教養など、ジャンルやカテゴリーの狭間からこぼれ落ちるもの、はみ出すズレにいつも無意識で感じている可能性を再発見する機会になれば、と。

日本語は、中国から入って来た言葉を、漢字、カタカナ、ひらがなに「分解」して表現手段として実用化した歴史を持っていますよね。その都度、その使い分けに言外のニュアンスが孕まれるという、西欧の多くの言語に比べて実に面白い、多様な表現様式を備えていると思います。「狭間」ではなく「ハザマ」とすることである種の軽みがそこに生まれ、従来の「狭間」とは異なる外来のイメージを纏わせることができるなど意図しているわけですが、こうしたちょっとした遊び心を感じることが表現の喜びの原点にあるように感じています。自己満足かもしれませんが（笑）。『群像』は、伝統的に進取の精神に富んだ文芸誌で、書き手の問題意識が赴くまま、自由な論考を受け入れてくれます。様々なジャンルを横断しつつ、学術的な論考とエッセイのハザマを楽しませてもらっています。

長 丸山先生にとって、文章を書かれる、活字にまとめる、というのはどのような意味がありますか？

丸山 映像は、大事なものを考える手段の一つですが、言葉、活字にあっては、当然読めば読んだことを、今度はアウトプットするという循環も生まれます。これも自らとの対話です。書くという行為も、考えることを楽しむ大事なプロセスです。言葉にしてみる過程が、思いも寄らぬところにまで自らの思考を連れていってくれることの面白さを感じています。

言語というものが思考に、人間の認識にもたらしているものは大きいですね。こうした領域の話は、心理学、精神分析、言語学、哲学などからのアプローチのみならず、AI社会論などとも繋がってくる話ですね。

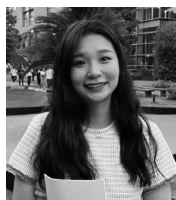
長 加えて本年から、本研究科の特任教員に着任されました。最後に社会デザイン研究科や立教大学、社会人大学院の印象をお聞かせください。

丸山 様々な専門性をお持ちの先生方が、勿論その足場にしっかりと立脚しながらも、複眼的な視点を持ち、対話から新たな発想、研究を展開し、洞察を深めていこうとされていて、非常に風通しの良い場所だなと感じます。

キャンパスもいつも伸びやかな風が流れているイメージがあっていいですね。正門から緑のチャペルを潜り抜けるときも背筋が伸びる感覚がありますが、11号館から西に向かって伸びる道も、歩きながら考える、良き空間です。

たとえば土曜の午後、それぞれのテーマ、問題意識を持つ人々が三々五々集う社会人大学院という場も、大学という学びの場の原点に帰ったようで、そうした場で一緒にもの考える幸せを感じています。学生の皆さんにリスペクトを抱きながら、キャンパスに足を踏み入れる時、こちらも襟を正す思いでいます。

インタビュー全文は、
社会デザイン研究科ホームページでご覧になれます。



こ えん えん
胡 圓圓さん

中国上海からの留学生で、武蔵野大学人間科学部卒業後、立教大学大学院社会デザイン研究科に進学。ジェンダーについて研究している。特に、近年の若い世代の男性の化粧行動に関心を持っている。博士前期課程2年、倉本ゼミ所属。

新たな学びと成長

コロナ禍により、大学生活の大半をオンラインで過ごさざるを得ませんでした。しかし、日本での学校生活をより深く経験したいと考え、大学院への進学を決めました。研究テーマとして、若い世代の男性の化粧行動が従来の男性像を変えているのかについて探求しています。立教大学では、学業に専念するだけでなく、ジェンダーフォーラムというジェンダー教育・研究の拠点としての活動にも積極的に参加しています。公開講演会やジェンダーセッション、コーヒアワーなどを通じて、自分自身の問題として社会生活におけるジェンダーの問題に気づき、理解し、深く考える機会を得ています。

勉強以外にも、生活面でも立教大学の環境に助けられています。一人で行き詰まったときには、同じ学生との会話が新たなヒントを与えてくれることもあり、特に社会デザイン研究科では経験豊富な社会人の先輩が多く、各業界、各年代の社会人と話すことで、新しい視点を得ることができ、彼らとの交流は私にとって大きな支えとなっています。

立教大学での学びと経験は、私の成長に大きく寄与しています。これからも引き続き、自分の研究を深め、豊かな学生生活を送りたいと思います。



こう の ち か よ
河野 モドルーシャン 千佳世さん

民間企業で企画推進や広報PRに携わり2016年起業。現在は企業・団体の広報や新規事業の企画を担当、スタートアップ支援やアップサイクルブランドをプロデュースし活動中。博士前期課程1年、倉本ゼミ所属。

微力が美力となる社会へ

京都に生まれ、歴史と伝統が溶け込む風景を身近に感じながら育ちました。「こうあるべき」という堅苦しさから飛び出すようにイタリアへ留学しましたが、そこで目の当たりにしたのは歴史を大切にす文化、人とのつながりや温かさでした。この経験が人生を変える大きなヒントとなり、千年の美を次の時代につなげたいと起業しました。決して順調な時ばかりではなく、もし男性ならば結果が違ったのではないかと、もっと可能性があったのではないかと「ジェンダー視点」に気づいた瞬間がありました。そして、このモヤモヤを具象化し、より主体的に生きるために大学院進学を決意しました。大学で学んだ文学と芸術の延長線上に見つけた新しい扉です。過去の経験や学びが線としてつながる喜びや想いを形にして社会へ届ける、その確かな方法論がここ「社会デザイン研究科」にはあります。

現在、伝統から紐解く社会デザインの可能性に着目し、和紙産業の地域活性化とジェンダーの関わりを研究しています。研究テーマが異なる仲間とそれぞれのテーマに隠れる社会課題を抽出し議論する「研究者」としての「まなざし」を大切に、豊かな時間を過ごしています。微力が美力となり、社会をデザインする大きな力になると信じています。



いし い あき と
石井 彰人さん

東京都出身。明治学院大学社会学部社会福祉学科卒業後、リベラルアーツ教育に重きを置いている立教大学社会デザイン研究科に魅力を感じ進学。現在は地方鉄道の観光戦略を研究している。博士前期課程2年、三浦ゼミ所属。

特徴的な研究科での学び

私は、大学時代は他大学の社会学部で福祉学を専攻しておりました。学部で講義を受ける中で福祉学という学問分野自体には、超高齢社会に突入したと言われている今の日本では重要かつ需要の高い価値があると感じました。ただ、学部時代の教養科目で福祉学以外にも環境学や法学、社会学の分野で自身が面白いと感じられる講義が多いと感じていたため、次第にそうした様々な学問分野を学習出来る大学院への進学を目指すようになりました。個人の研究テーマとしては地方の鉄道会社が人口減少社会を迎える中で打ち出している観光列車や鉄道イベントのコロナ禍での取り組みに焦点を当て、実際に現地へ赴いてフィールドワーク等を行う計画を立てる日々を送っています。この研究科は学術的な分野でキャリアを築いてこられた教授の方のみならず、各分野の実務に実社会でプロとして携わられてきた方から自らの経験と知識を享受出来る点で魅力的であると感じています。また、多くの他大学と異なり立教大学は特定の学問分野に囚われないリベラルアーツ教育を重視しており、他研究科科目や学部の講義も受けることが出来、日々刺激を受けながら充実した学びを得ています。



しば た ゆたか
柴田 豊さん

立教大学経済学部経済学科卒業後、会社員を経て日本語教師に。国際交流基金の派遣プログラムで南オーストラリア州教育省に二年間勤務。現在は留学生に日本語を教えるとともに日本語教師養成講座の講師も務める。博士前期課程1年、品治ゼミ所属。

ただいま「自由の学府」立教大学

私は29歳の時にキリスト教の洗礼を受けました。しかし、まったく敬虔ではない不真面目なクリスチャンです。旧約聖書を読み通そうとしても何度もギブアップしています(新約聖書は読み通しています)。ふと、こんな私が細々ながらも長く信仰生活を続けているのはなぜだろうかと疑問に思いました。さらにこの先、私の信仰生活はどうなるのだろうか。この「自分探し」が研究の出発点です。そのためにまず周囲にいる先輩教員である定年退職後のクリスチャン男性を対象としたライフストーリー研究を行っているところです。

私はかつて、この立教大学で大学生活を送っていました。当時から立教大学は「自由の学府」と呼ばれていましたが、再び大学の門をくぐり改めてこの「自由の学府」を実感しています。どの先生方の講義にも共通していることは知識や理論を一方的に詰め込むというよりは今まで気が付かなかったことに目を向けさせてくれるものです。またのびのびと自分の意見を言ったり質問をしたりすることができる雰囲気があります。

数十年ぶりの立教の学び舎は昔の面影が残る校舎とモダンな校舎が共存しています。新旧の調和が取れた落ち着いたキャンパスになっています。



思考停止を打破せよ！研究科で学んだ「現実と向き合う力」



2024年卒

かね こ じ とう しょ ゆう み
金子(地頭所)裕美さん

2024年3月修了。電機メーカーのインハウスシンクタンクにて生活研究、未来研究、社会デザイン研究のプロジェクトに携わる。その後、三菱食品(株)戦略研究所上席研究員。修論のテーマである「持続可能な食」をビジネスを通じて探求中。

社会デザイン研究科の一番の特徴は「多様性」です。年齢層は20代から70代まで幅広く、国籍、研究テーマ、職業(学生、社会人、公務員など)を超えて集います。そして、先生方はそれぞれの専門分野において第一線で活躍されている方々です。このような多様な背景を持つ学生と、専門性の高い先生方との対話やディスカッションは、驚きと発見の連続です。その活気あふれる様子は想像に難くないでしょう。

研究科で学んだことのひとつに、「固定観念を疑い、新たな視点から考える」ということがあります。例えば、経営環境のキーワードとして、「グローバル」は、よく用いられますが、私がこれまで見てきたグローバルは、所属する企業や業界、あるいは西側世界

というフィルターを通した「世界」に過ぎませんでした。広い視野で、客観的に見ているつもりでしたが、実際には「フィルターバブル」の中で、情報収集をしていたのかもしれません。また「環境問題解決」は経済成長のチャンスだと言説がありますが、環境問題の根本原因は、自然の回復や分解サイクルをはるかに上回るペースで地球を搾取していることにあります。そのような状況で、さらに「成長すべき」という発想で良いのでしょうか。成長という常識があまりにも浸透しすぎて、「思考停止」に陥っていたように思います。

戦争という難しい問題についても、授業を通して自身の無知を痛感しました。「もう止めてほしい」と願い、罪のない市民が、戦禍で苦しむ姿に心を痛めながらも、何もできない自分に絶望し、次第にその現実から目を背けていました。しかし、何もできなくても、事実を知り、認識し続けることこそが、社会は変えていく第一歩であることを学びました。

このように、研究科での学びは、固定観念を疑い、批判的に考える力を養うことに役立ちました。目の前にある課題に真摯に向き合い、小さな実践を積み重ねていくことこそが、社会変革につながると信じ、今後も努力していきたいと思います。

研究科で再構築した考えを実践する。



2022年卒

さい とう あき ひろ
齋藤 映博さん

2022年3月修了。2016年の台風10号災害の際、岩手県岩泉町で災害支援活動を開始。その後西日本豪雨はじめ水害被災地で水害家屋の応急復旧作業を行う。現在は働きながら週末に能登半島地震の支援活動に従事。一般社団法人オーロラブラック代表理事。

西日本豪雨の際に災害支援に関わった経験を元に、研究科では「水害被災地における技術系ボランティアと関係各所の連携について」という修士論文を執筆しました。長坂ゼミに所属し、長坂教授の災害支援の現場での経験・知識に触れ、その後の災害支援活動の取り組み方、考え方を発展させることができました。また、研究科では他の方々が関わる社会問題に触れ、全ての社会問題には関わりがあり、単独では存在しないと考えるようになりました。多様な講義を通じ、それまで取り組んでいた災害支援が、知らず知らずのうちに「正義」を持ってしまっていたことに気づきました。講義の中で無意識にもってしまっていたその正義や固定概念を壊すことができ、今後、どのような災害支援活動が適切なのか、自分自身の考え方を再構築できたことが、研究科で得た大きな財産となっています。

研究科修了後は働きながら災害支援活動を継続しており、現

在は能登半島地震の支援活動に週末に通っています。研究科で学んだことをひとつずつ実践していくことを今後の目標に、非営利型の一般社団法人を設立しました。ボランティアの存在が必要のない制度や仕組みがあることが理想ですが、制度や仕組みが整うまではその隙間を埋めるためボランティアの力は必要だと考えています。今後は法人として、個人で活動している技術力のある支援者の待遇・福利厚生向上、これまでボランティアが無償で行っている技術系支援の待遇の改善、可視化されていない支援活動の周知、資金の困らない支援活動の構築などに取り組んでいきたいと考えています。

「どうしてそんなに支援活動をするんですか？」と聞かれることがあります。もし目の前で小さいお子さんが転んだら大丈夫？と声をかけて手を貸すでしょう。まだやったことのない人にとってはそれが遠くの、知らない人たちの出来事だから二の足を踏んでしまっているだけだと思うのです。すでに実践されている方も多いと思いますが、ぜひ皆さんも研究科で学んだことを、社会課題解決のために、そして少しでも遠くの、知らない人たちのために使ってみてください。



死にたいとつぶやく 座間9人殺害事件と親密圏の社会学

中森 弘樹／著
慶應義塾大学出版会
四六判／328ページ／2022年12月発行
定価 1,980円(本体 1,800円)

2022 年 12 月、本研究科の中森弘樹准教授による新著が発表されました。本書は、2017 年に起きた座間 9 人殺害事件をその題名に掲げています。周知の通り、同事件は容疑者男性が SNS を通じて「死にたい」と表白する女性たちと知り合い、自宅に招いた上で殺害するという恐るべき事件でした。著者は、事件から数年を経た現在にあらためて同事件を入り口として、現代社会が「死にたい」という声をあげる人々の声をどのように受け止めるべきかを論じてます。

そもそも、職場の上司や同僚はもちろん、友人、恋人、あるいは家族といった親しい間柄にある人々に対しても、「死にたい」という声をあげることは容易なことではありません。たとえば自分の家族から「死にたい」という言葉を聞いたとき、聞いた側が相手の言うことを落ち着いて受け止めることはなかなか難しいことです。「死にたい」という言葉は、それを発する人が思ってもいないような過剰な反応を、親密な他者に対して引き起こすものなのです。本書はこうした「死にたい」という発話のもつ特徴が、SNS 空間での希死念慮の表明の流行や、ひいては SNS を介して行われた座間事件のような悲惨な事件が起こる遠因をなしているという構造に着目したうえで、その構造の実態の分析と、それに歯止めをかけるためにわれわれに必要な態度は何であるかの考察に取り組んでいます。

本書で取り上げられている題材は、殺人事件、SNS、シェアハウスと多種多様であります。扱っている方法も、記事の内容分析、Web 上の人的ネットワークやテキストの分析、古典的なフィールド調査までさまざまです。一般に、異なった場面で起こっている知見を、統一的かつ正確に捉えることは難しいことです。ましてや、それらをさまざまな調査手法を組み合わせで一貫した知見として組み立てることはなおさら困難です。ですが本書は、それぞれの対象の特徴に応じて、どういう調査と分析を行えばよいかを緻密に考察しながら、あらたな知見を生み出すという困難な作業を見事にこなしています。その点で本書は、動きの捉えづらい複雑で微細な社会現象の調査や分析を行いたい学生にとって、リサーチデザインの模範としての資格を備えているといえます。社会病理、あるいは社会調査一般に関心を持つ読者に対して一読をお勧めします。



脱成長と食と幸福

セルジュ・ラトゥーシュ／著 中野 佳裕／訳
白水社
四六判／230ページ／2024年8月発行
定価 3,190円(本体2,900円)

本研究科 MSDA コースの中野佳裕特任准教授による、フランスの思想家セルジュ・ラトゥーシュ氏の著作の翻訳書『脱成長と食と幸福』が2024年8月に白水社より刊行されました。訳者は、これまでも著者ラトゥーシュ氏の著作の翻訳を多数手がけており、よく知られる著作として『経済成長なき社会発展は可能か? —〈脱成長〉と〈ポスト開発〉の経済学』(作品社、2010年)、『脱成長』(白水社、2020年)があります。訳者はこれまで一貫して、無際限な成長をめざす経済活動に対して経済のローカライズを通じた「脱成長 (décroissance)」——ここでフランス語の décroissance は、経済成長を前提としたわれわれの「想念からの脱却」も意味する——の必要性を訴えつけています。本書は、こうした問題意識を、とりわけわれわれの生活の基礎をなすところの「食」と「幸福」という主題に即して論じたものです。

では、脱成長を論じるうえで、なぜ「食」と「幸福」が問題なののでしょうか。それはこれらのわれわれの生活と切っても切り離せないところのものが、まさに無際限な成長をめざす経済の観念によって歪められているからだ、というのが著者の考えるところです。

たとえば本書の第 1 部では、ヨーロッパ近代以降の「幸福」の観念が、節度ある「良き生」を送ることと切り離されてしまい、可能な限り多くのお金を獲得するという経済学的観念と不可分のものになってしまったことが強く批判されています。その上で、

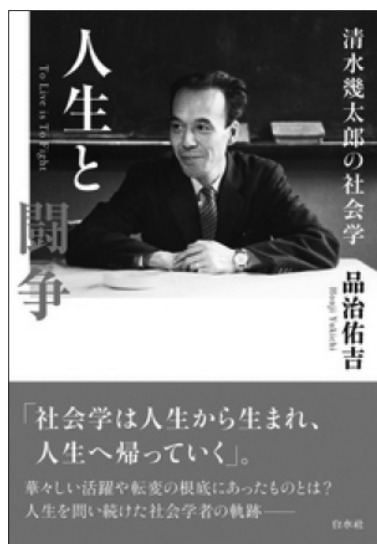
望ましい食のあり方を論じる第2部では、食のグローバル化を進めてきた経済成長社会が、食糧消費者の側ではジャンクフードがもたらす肥満病に象徴されるような過剰な消費と飽食、そして食糧生産者の側では生産力至上主義的な農業体制をもたらし、自然の限界を越えた持続可能性のない社会体制をつくりあげてきたことを強く批判しています。

現存するグローバルな経済秩序のあり方を問い直し、さらに節度ある豊かな社会を構築するためには、まず既存の社会が生み出す食生活のあり方を批判し、まっとうで良質な食生活をわたしたちの手に取り戻す必要があるというのが著者の考えるところです。ゆえに「食は脱成長の企ての重要な側面の一つ」(p.67)なのです。

具体的な取り組みとして著者が訴えるものの一つがスローフード運動です。スローフード運動は、スピードを追い求める社会が生み出したファストフードやジャンクフードに抗して、伝統的な食

生活と農生産の再生と再評価から出発し、消費社会のシステム全体を見直そうとする取り組みです。その取り組みは、食の生産と消費をグローバルな経済の連関から切り離し、生産地と消費者を中心とする地域単位に再ローカル化することを要求しています。これは日本の文脈で言うところの「地産地消」にはかならず、その限りで本書の主張は日本のこれまでの消費運動や思想とも結びつき得るものだといえます。

なお、本書の記述やヨーロッパの脱成長運動の含意は、ヨーロッパ圏とりわけフランスにおける概念や言葉を通じて紡がれたものであり、それがもつ含意の正確な理解を欠くと大きな誤解に陥りかねません。訳者である中野准教授は、そうした誤解を避けるための丁寧な説明を巻末の「解説」のなかで行っています。こうした補助線も含めて脱成長の思想と運動の何たるかを理解するうえで、本書は日本の読者にとっての格好の入門書であると言えるでしょう。



人生と闘争 清水幾太郎の社会学

品治 佑吉／著

白水社

四六版／332ページ／2024年8月発行

定価 4,290円(本体3,900円＋税)

本研究科品治佑吉助教の研究成果をまとめた単著が白水社より刊行されましたので紹介します。

著者は東京大学大学院人文社会系研究科で社会学を専攻し、ライフコース、労働、読書メディア史といったさまざまな分野の研究に取り組んできました。なかでも著者の関心は、日本の社会学の歴史的・知識社会学的研究にあります。その関心を清水幾太郎(1907-88)という社会学者を対象にしてまとめたモノグラフが本書です。

清水の言論活動と社会学とつながるキーワードとして、著者が着目した言葉が「人生」です。たとえば清水が1959年に光文社の「カッパ・ブックス」レーベルから刊行した『社会学入門』の

冒頭には、次のような記述が見られます。

「この小さな書物は、本当の素人のために書いたものである。[……] 同じ問題を取りあげるにしても、ただ論理にしたがってでなく、むしろ、私自身が出会った経験——といっても、貧しいものであるが——と結びつけて、これを読者に示すという方法を選んだ。それには、もちろん、読みやすくしようという意図もはたっているが、それよりも、社会学は人生から生まれ、人生へ帰っていくという私の古くからの信念が物を言っているのだと思う。」(pp.3-4)

「人生」!著者の叙述は、いやしくも社会学の研究書で、いきなりこの言葉に遭遇したことからの驚きから始まっています。なぜなら「君の研究は人生論的だね」「あの本は単なる人生論にすぎませんよ」といった評言は、もっぱらその研究が学術的な水準において劣っているということを含意するものであり、したがって社会学者をはじめとする多くの社会学者がきわめて恐れるところだからです。にもかかわらず、なぜ該博な知識を誇ったはずの清水が、「社会学は人生から生まれ、人生へ帰っていく」という「信念」を掲げて社会学の研究に取り組むことができたのか。本書の問いはこの点に集約されています。

この問いに対する答えは著書を通じて確認していただくとします。重要なのは、社会デザイン学の研究においても、学生一人一人の研究関心がそれぞれの「人生」の問題関心に発するものであるということは決してマイナスではなく、むしろ研究遂行にとって大きなプラスを提供するものであるということです。清水も本書の中で繰り返述べているとおり、個人が社会生活を送る中で遭遇した矛盾や違和感は、決して個人に帰属するものばかりではなく、社会の側に存在する矛盾や亀裂がどこにあるかを言い当てている場合が少なくありません。だとするならば、研究科の学生のみなさんが社会生活のなかで遭遇した疑問を学術研究の主題とすることは、社会科学全体にとってかえって大きな稔りをもたらすことでもありえます。本書の記述は清水幾太郎とその周辺の知識人の知的交流の記述に充てられていますが、そこには現代を生きるわれわれの社会を考える態度に訴えるものを含んでいます。

2024年7月13日(土)

会場 立教大学池袋キャンパス 11号館 A301教室(対面開催)

14:00 ~ 16:30

公開模擬授業

「初めての社会デザイン学 -Invitation to Social Design Studies-(1)」

長有紀枝 教授 「ジェノサイドの防止と社会デザイン」

中森 弘樹 准教授 「親密圏の社会デザイン」

品治 佑吉 助教 「人生のキャリアをデザインする」

2024年10月26日(土)

会場 立教大学池袋キャンパス 11号館 A301教室(対面開催)

14:00 ~ 16:30

公開模擬授業

「初めての社会デザイン学 -Invitation to Social Design Studies-(2)」

大熊 玄 教授 「対話する社会デザインの哲学」

倉本 由紀子 教授 「ジェンダー視点からの社会デザイン」

長坂 俊成 教授 「リスクガバナンス概論 ~社会デザインの視点から~」

今年度は学内外の入学希望者に向けて、社会デザイン研究科の学修内容や学生生活の紹介のために公開模擬授業を池袋キャンパスにて7月と10月の2回に分けて対面にて開催した。いずれの模擬授業でも、90名近い参加者とともに、各教員による研究内容の説明や、入学手続きや学生生活に関する説明が行われ、盛況を博した。模擬授業が終了した後も学生との活発な質疑応答が交され、入学希望者のみならず教員にとっても非常に有意義な催しとなった。(品治 佑吉)



2024年10月26日(土)

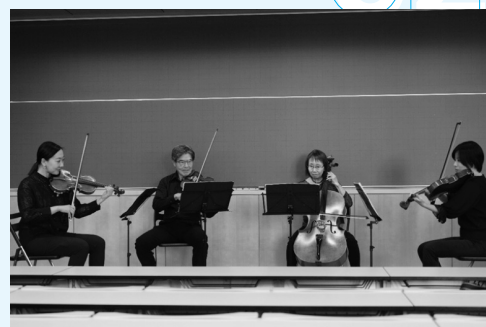
会場 立教大学池袋キャンパス

主催 立教大学大学院社会デザイン研究科・社会デザイン研究所

立教大学社会デザイン研究科ホームカミングデーイベント

2024年10月20日「社会デザイン研究科 初 ホームカミングイベント」

満開の金木犀が香るキャンパスで、社会デザイン研究科「初」ホームカミングイベントが開催され約30名が参加した。第1部では、長坂俊成教授が、能登半島地震から10か月経った石川県の現状や被災者支援の課題、また南海トラフ地震が起きると84万の仮設住宅が必要になることなどについて、ご自身の支援活動を基にご講義された。第2部では、本研究科修了生が近況報告を行い、多様なフィールドで活動している校友を知る機会となった。その後、博士課程前期修了後、後期課程に進学した本研究科の学生2人と立教卒業生2人(1人は理学部講師)による演奏会が行われ、モーツァルトやバッハのカノン、そして東日本大震災復興ソング「花は咲く」が迫力ある弦楽四重奏で奏でられ、観客を魅了した。(倉本 由紀子)



2024年10月26日(土)

会場 立教大学池袋キャンパス太刀川記念館3階カンファレンス・ルーム

主催 立教大学大学院人工知能科学研究科

共催 立教大学大学院社会デザイン研究科

公開シンポジウム

「ともに苦しむ人道危機:ルワンダ・ジェノサイドから30年」

1994年4月~7月にアフリカ東部のルワンダで約80万人が犠牲となったジェノサイド(集団殺害)から30年。改めてこの事件を問い直し、ともに苦しみながら私たち「よそ者」の役割を問おうと、本学大学院人工知能科学(AI)研究科が企画・主催、本研究科の共催で表題のシンポジウムを開催した。AI研究科から大庭弘継特任教授が、本研究科からは長が登壇し、人道的介入や人道援助の課題について、また佐々木和之ルワンダ・プロテスタント大学平和紛争学科准教授が現地の和解や赦しの取り組みについて、さらに、同国出身で東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士後期課程在籍中のシュクル・ムレカテさんが、現在の人々の様子について報告・問題提起を行った。これを受け、提起された課題に対し参加者が各自のスマートフォンを使い回答、議論を深めた。(長 有紀枝)



The MSDA News

MSDAとはMaster of Social Development and Administrationの略称で、社会デザイン研究科に設置されている英語コースです。詳しくはHPをご覧ください。https://msda.rikkyo.ac.jp/

Hiroshima Field Trip - January 2024

On the first day, the MSDA participants visited the Hiroshima Peace Memorial Museum and other facilities, where they could observe A-bomb-related materials, artifacts, and testimonies. At the Peace Memorial Park, Specially Appointed Associate Professor Nakano explained the significance of a landscape architect, Isamu Noguchi's monument, and its historical context. The participants then took a tour of Hiroshima City to expand their perspectives. On the second day, the MSDA participants visited Miyajima Island and the Itsukushima Shrine. They experienced a unique atmosphere, unlike Tokyo, surrounded by forests, ancient shrines, and temples. They were especially impressed by the magnificent vermilion Otorii (Grand Gate) standing offshore. They also visited the Shishi-iwa Observatory and enjoyed the beautiful view of Hiroshima Bay and its small islands.



Graduation Ceremony - September 2024.

On September 19th, 2024, the graduation ceremony for the Master of Social Development and Administration (MSDA) course was held. The MSDA course faculty, staff, graduates of 2024, and their families and friends attended the ceremony.

Eight graduate students from Mozambique, Tonga, Honduras, India, Vietnam, and China have completed their studies at Rikkyo University. The students have developed strong relationships and will cherish their global friendships after graduation.



Ako MUTO
Specially Appointed
Professor

A New MSDA Faculty Member

"Crises such as climate change, natural disasters, pandemics, conflicts, disparity, and inequality are deeply interconnected and affect society today. MSDA supports research aimed at identifying diverse barriers and exploring solutions to build a society that safeguards dignity, livelihoods, and prosperity for all. I'm honored to be part of MSDA."

The fourth-term students have completed their enrollment

The entrance ceremony took place on September 19th, 2024, and the MSDA course welcomed 12 new students, making the fourth intake of students. They come from the Philippines, Ghana, Tanzania, and China.

研究科のイベント案内

進学相談会は7月、11月の2回。その他模擬授業や公開講演会を実施しています。詳細は研究科公式サイトでお知らせします。

入学試験概略 (2026年度(2026年4月1日入学者対象))

博士課程前期課程

- 入学定員 50名
- 入学試験実施時期 秋季と春季の2回
- 対象 出願資格を有する者、もしくは本大学院において、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者。
(注) 後者の出願資格を得るためには、出願に先立ち、出願資格審査を受ける必要があります。
- 選考方法 書類審査、筆記試験、口頭試問の成績を総合的に評価して行います。

※入試日程や試験区分は大学のWebサイトで公開される入試要項をご覧ください。

博士課程後期課程

- 入学定員 5名
- 入学試験実施時期 春季のみ
- その他 出願資格は前期課程と異なりますので、入試要項に掲載される内容をよくお読みください。

※入試日程や試験科目は大学の公式サイトで公開される入試要項をご覧ください。

前期課程・後期課程とも、詳細は研究科公式サイトでご確認ください。

研究科・入試に関するお問い合わせ

立教大学独立研究科事務室 cde-ad@rikkyo.ac.jp

発行/立教大学大学院
社会デザイン研究科
発行人/長 有紀枝
編集担当/品治 佑吉
発行日/2025年2月7日
〒171-8501
東京都豊島区西池袋3-34-1

More Information

社会デザイン研究科では、講演会やイベントの情報を研究科公式サイトでお知らせしています。

社会デザイン研究科
公式サイト
https://sds.rikkyo.ac.jp/



社会デザイン研究科
X
https://x.com/rikkyo_sds

